

Research Expectations

特集：AIのある未来



関東学院大学

<https://univ.kanto-gakuin.ac.jp/>



世界を読み解くカギは「愛」だ

かつてない速度で押し寄せ、社会の仕組みを根底から塗り替えるAI革命。
指先一つで世界と繋がり、瞬時に最適解が提示される現代において、かつては空想の産物であった人工知能（AI）は、いまや社会を循環する不可欠な存在です。
人々の営みは目に見えぬ演算によって静かに、けれども劇的に日々変化しています。

様々な場面で私たちの理想を現実にしてきたAI。
しかし、技術が発達していく利便性の影で、「人」の存在が脅かされている事実にも目を向けなくてはなりません。
あらゆる事象が効率化される現代において、「人」には何が求められているのか。
複雑で繊細なシステムを活用し、日常の便利さが増す一方で、新しい疑問も生まれています。

なぜ私たちはAIが導き出す答えを受け入れられるのか。
AIを駆使して解決できる課題とはどのようなものなのか。
そして、AIはどこまで「人」と対等な存在でありうるのか。

そうした疑問の矛先は「人」であり、その原点は誰かを思う心、すなわち「愛（AI）」ではないでしょうか。
関東学院大学の研究者たちが向き合っているのは、単なるデータではありません。より確かなものにするために、「人」に目を向けた私たちの未来です。

最先端の技術を使いこなしつつも、人間だからこそ抱ける「問い」を深め、実社会の解決に臨む研究者たちの「愛（AI）」をご紹介します。

AIを愛で読み解けば、未来はもっとおもしろい



田林 雄

TABAYASHI YU

経営学部 准教授

〔学 位〕博士(環境学)

〔専門分野〕環境学

AIが解決した「昔の地図」の意外な課題 先端技術で研究を加速させ、気候変動の解明を

河川の「窒素」を、流域全体から研究する

気候変動の影響が社会や日常生活で指摘される中、環境に関する研究がさまざまな分野で行われています。経営学部の田林雄准教授は、河川の水質に関する研究を続けてきました。

特にその中でも、田林が着目してきたのは河川に含まれる「窒素」です。自然界にある物質は、地球上でさまざまな場所や生物の間を移動し、また元の場所へ戻ってくるという「物質循環」を繰り返します。たとえば炭素なら、大気中の二酸化炭素が光合成によって植物に取り込まれ、動物が植物を食べることで動物の体内に移動し、その動物の死後にまた大気中に二酸化炭素などの形で放出

されています。窒素も同様に循環を繰り返しており、その「窒素循環」について河川の水質を起点に調べてきました。

「水中の窒素が過剰に増加すると環境が悪化し、生物が育ちにくくなるケースがあります。また、窒素循環は炭素循環と連動しているため、地球の気候変動にも窒素の増加が影響している可能性があります。日本では、戦後の都市化が進む中で河川に流れ出る窒素の量が増えてきたと考えられます。そこで昔から現在にかけて、河川における窒素がどのように変化してきたのか研究しているのです」

とりわけ田林が分析しているのは、河川の

流域の変化と窒素の関係です。流域とは、ひと言でいえば、降った雨や雪解け水が同じ川へ流れ込む範囲のこと。田林は1945年前後と今を比べて、河川の流域内がどう変わり、それに伴って水中の窒素がどう変化したかを調べようとしています。ある河川を対象として、流域の土地利用はどう変わったのか。森だった場所が畑になったことで、窒素に変化は生じているのか。こうしたことを追究していきます。



デジタル化を阻む、昔の地図の「特徴」とは？

流域の移り変わりを調べるには、過去と現在の地図を比較する方法があります。田林もその手法を実践してきましたが、ここには1つの課題が存在していました。

「現在の地図データはデジタルで作成されていますが、過去の地図データは多くが手書きです。そのため、昔の地図をもとに流域の変化を算出するには、人が手作業で行う必要がありました。その分、膨大な手間がかかって

いたのです」

たとえば1945年当時の地図を見て、この土地が森だったのか畑だったのかを、地図記号から目視で判別する。さらには、その土地の面積を人が計算する……。こうした作業を行う必要がありました。

「昔の地図をスキャンして、コンピュータで読み込ませれば、手作業ではなくデジタルで流域の変化の計算を自動処理できるのでは、

と思うかもしれません。しかし、昔の地図は手書きのため、書き方にわずかなブレがあります。同じ意味の地図記号でも、1つ1つに細かな差が見られる。従来のコンピュータは、まったく同じものは分類できますが、“少し違うけれど同じもの”の判別が苦手であり、誤って地図記号を認識するケースも多くあります。その結果、デジタル処理は十分に進みませんでした」

課題解決のカギとなった、AIの画像分類技術

そこで、この課題を解決するために取り入れたのがAIでした。近年、AIによる画像分類技術の精度は飛躍的に向上しており、たとえば「この写真の動物は犬か猫か」といった判断ではAIの正答率が劇的に高くなっています。その技術を活用し、手書きで書かれた地図記号をAIで自動分類しました。併せて地図上の境界線もAIが認識することで、当時この土地がどう使われていたか、どのくらいの面積だったかを算出できるように研究を進めています。

「今までよりも迅速に、過去と現在の地図を比較することが可能になりました。効率的に行えるので、今後はより広範囲で、土地の変化を算出することもできるはずです。すると、1つの河川だけでなく、もっと大きな規模で分析が進められるのではないのでしょうか。たとえばここ数十年の地球上の土地利用の変化と、窒素の関係を調べることも、いずれ可能になると思います」

田林はAIについて、「今まで人間が行って

いた作業を、数十倍あるいは数百倍早くこなせるケースもあります。なおかつ精度も高いのですから、使わない手はありません」と笑顔を見せます。日々深刻になる地球環境。その解決を目指す研究者のかたわらにも、AIという心強いツールがあります。



近藤 夕騎

KONDO YUKI

情報学部 講師

〔 学 位 〕 博士(工学)

〔 専門分野 〕 リハビリテーション科学

リハビリの研究者がなぜ大学院でAIを学んだのか
医療現場で感じた課題を解決するために

医療現場で抱いた「疑問」を解きたくて、研究の道へ

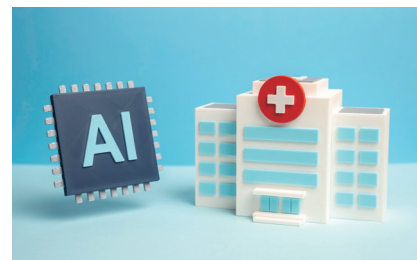
病気や怪我をした人などに行う「リハビリテーション」。この領域の課題解決には「AIが有効」だと考え、研究を進めているのが、情報学部の近藤夕騎講師です。

近藤は11年間、理学療法士というリハビリテーション専門職として医療機関で勤務していました。向き合ってきたのは、「神経難病」といわれる根治療法(根本的に治す治療法)のない病気。具体的には、パーキンソン病や脊髄小脳変性症がそれに当たります。これらを患う人のリハビリテーションを行ってきました。

臨床で働きながらノウハウを積む中で、近藤は現場の疑問を研究として掘り下げることに早くから着手していました。大学講師に転じたことで、研究活動はさらに加速していきます。「研究を行う上で大切にしてきたのは、クリニカルエスチョン(臨床的疑問)の視点です」。

クリニカルエスチョンとは、簡単にいえば医療現場(臨床)で働いていると生じてくる疑問のこと。現場にいる時に感じた課題やわからない点を、研究で解き明かそうとしました。

AIを活用し始めたのは、こうした研究を進める過程でのこと。「どうすれば医療現場の課題や疑問を解消できるのか。その方法を模索する中で『AIが有効になる』と考えました」。



パーキンソン病の大きな課題にAIを用いる

具体的には、どのようにAIを活用しているのでしょうか。一例として挙げるのは、AIによる「姿勢推定技術」です。これは、人の動画や画像から肩や肘、膝といった関節点の位置をAIが検出し、どのような姿勢かを推定する技術。この技術を応用して、パーキンソン病などに見られる「すくみ足」という症状の研究を進めました。

すくみ足とは、パーキンソン病患者の約半数に現れる症状で、「歩こうとしているのに、足が前に出なくなってしまう現象」だと近藤は説明します。発症すると転倒する危険もあるため、日頃の治療で少しでもすくみ足の症状を抑えなければなりません。そのためには、施した治療の効果を測定し、より効果のある治療法を確立していく必要があります。

「そこで重要になるのが、治療の前後で『すくみ足の症状が出にくくなったか』を測定することです。これまではその測定をするために、すくみ足を誘発するような環境で患者に



歩いてもらい、その動画を見ながら専門家が手作業で『すくみ足が出現した時間』を計測していました。非常に手間のかかる方法だったといえます。この作業を自動化し、現場の負担を軽減できないか。そう考えたときに、AIの姿勢推定技術を活用するのが最適だと判断しました」



AIの技術により、治療の効果測定を「効率化」する

この考えをもとに開発したのが、AIによるすくみ足検出システムです。患者の動画をAIの姿勢推定技術で分析し、「すくみ足が出現している」と思われる部分を検出。時間などを自動で測ります。今まで人が行っていた作業をAIが代替し、効率化を図るものです。

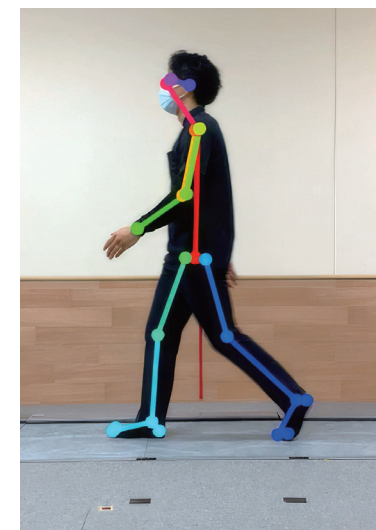
「医療現場では、患者の診察や治療が積み重なり、従来通りのやり方では治療後の評価や効果測定に時間もかかり、治療に即時反映することはできません。AIの活用は、こうした課題を解決するために重要になります」

さらにはAIの導入が進むと、医療の詳細なデータを蓄積することにもつながります。これも大きなメリットだと近藤は考えます。なぜなら今後、より高度な医療を目指すためには、さまざまなデータを分析すること

が不可欠。その未来に向けて今からデータを蓄積することが大切になるのです。

これらの研究を行うにあたり、医療現場の課題を解決するには、これまで歩んできたリハビリテーションの知識だけでは限界がある。そう感じた近藤は、AI・情報工学を学ぶため、筑波大学大学院に3年間通いました。「今まで自分が歩んできた学問とはまったく異なる分野で最初は戸惑いましたが、基礎から学んだからこそ今の研究に繋がっています」と振り返ります。

AIを活用したシステムの“開発”を進めてきた近藤。今後は、開発したシステムをどのように医療現場へ実装していくのか、そのプロセスを考えていきたいと力を込めます。目標に向かい、新しい学びを続ける探究者。近藤の挑戦は、未来の医療のためにあります。



本沢 彩

MOTOZAWA AYA

建築・環境学部 准教授

〔 学 位 〕 博士(文学)

〔 専門分野 〕 英語音声教育

「英語教育が不要になる」とは思わない
AIを活用しつつ、英語力を身につける授業とは

AIの登場で感じた、従来の英語教育とのギャップ

近年、翻訳アプリの精度が飛躍的に向上し、インターネットやSNSで出てきた英語の文章をアプリで日本語に翻訳して読むことは日常的になってきました。こうした技術は「機械翻訳」と呼ばれ、その裏側でAIが活用されています。

では、機械翻訳が進化の中で、英語教育はどのようにその技術を取り入れていけばよいのでしょうか。この観点で研究を進めているのが、建築・環境学部で共通科目の英語を担当する本沢彩准教授です。

研究を始めたきっかけは、AIによる翻訳を

日常的に使うようになり、これまでの英語教育との間に「ギャップが生じている」と感じたことでした。「機械翻訳を活用するのが当たり前になる中で、授業でまったく使わないのは不自然だと考えました。そこで機械翻訳の使い方を適切に伝え、なおかつ学生の英語力を伸ばす授業とはどのようなものかを検討しようと思い、研究に着手しました」

英文の書き方を学ぶ「ライティング」においては、授業でAIを活用するケースも増え、そのための教科書も出ているとのこと。一方、英文の読み方を学ぶ「リーディング」は、

ライティングに比べると、まだどのように授業で活用すればよいかを模索している状態でした。そこで本沢は、リーディングにおける機械翻訳の活用方法を考えるため、研究を進めてきました。



学生が「自分で考えなくなるのでは」という不安

これまでもリーディングにおける機械翻訳の研究はあったものの、その内容は「学生が機械翻訳を使ったことがあるか」「実際にどんなアプリを使っているか」などをアンケート調査で聞くものが中心でした。「しかしそれでは、具体的にどう使っているかが見えません」。そこで本沢の研究では、学生が機械翻訳を活用してリーディングの問題を解く様子を録画し、どのような時に、何がわからなくて、どういったことを調べたくて機械翻訳を活用しているのか、一人ずつ観察していきました。

「さらには観察後の学生にインタビューし、『あの時どのようなことを調べたくて機械翻訳を使ったのか』『何がわからなかったのか』などを聞いていきました。学生が機械翻訳を使用した意図や思考プロセスを、具体的かつ詳細に分析していったのです」

これにより分かったこととして、「学生は思った以上に、自分できちんと考えて機械翻訳を使っていました」と本沢は話します。

「機械翻訳を使えば、一瞬で答えを出すことができます。そこで懸念していたのは、この

技術を授業で活用した場合、学生が自分で考えることをせず、機械翻訳が出した答えをそのまま信じてしまうことでした。しかし今回の研究で使い方进行分析すると、多くの学生は、

まず自力で意味を推測したり確認したりしながら機械翻訳を用いていました。また、翻訳結果に違和感があればもう一度検証するなど、学生が“自分で考える”様子が見られました」



ENGLISH

「授業でAIを使わない方がいい」という意見に対しては？

こうした研究を通して、本沢は英語教育×AIの適切な関係を探っています。学生が英語力をつけるためには「AIを授業に取り入れられない方がいいのでは」という意見もありますが、本沢の考えは異なります。

「TOEICや留学対策などの特別な授業を除けば、大学の一般教養レベルの英語教育でAIを使わない選択肢はないと思っています。なぜなら大学の一般教養の英語教育は、学生の英語力を高めるだけでなく、専門科目での学びも支えるからです。つまり、日常生活だけでなく、専門性を高め、卒業後のキャリアを

築く上で役立つ英語力を身につけるのが目的。これほどAIが普及する中で、それを使わない授業を行っても、今後の実生活につながらない、現実世界と切り離されたものになってしまいます」

一方で、AIがあれば「英語教育は不要になるのでは？」という声が出ているのも事実。しかし本沢は、この考えにも異を唱えます。「AIを使えば単語や文章全体の意味はわかりますが、なぜこの単語を組み合わせるとこの意味になるのかという“文構造”を理解しないと、英語を使う力は十分につきません。そして

この文構造は、人が教える領域です」。

本沢が理想とする英語教育とは、学生がAIを活用しながら、それぞれの英語力を身につけていく形。その理想を目指して、英語教育のあり方を探求していきます。





渋瀬 雅彦

SHIBUSE MASAHIKO

経営学部 准教授

[学 位] 博士(経営学)

[専門分野] マーケティングリサーチ

AIの普及によって消費者はどう変わる？ その変化の構造を解明していきたい

インターネット、デジタル化の中で変化する消費者

インターネットが日本に普及し始めてから30年余りが経過し、Google、TikTokやInstagramなど多くのネットサービスが浸透していく中で、人々のメディア接触や買い物の方法も大きく変化していきました。普段の生活の中でも、InstagramやTikTokで知人やインフルエンサーから情報を得て商品を買ったり、スマホで情報収集してECサイトで商品を購入したりすることが一般化してきました。

経営学部の渋瀬雅彦准教授は、インターネット上に新しいコンテンツや仕組みが登場する中で、それらが消費者の心理や行動にどのような影響を及ぼしているかを研究してきました。

「インターネットなどの技術はとても便利で有益ですが、一方で負の影響も存在します。こうした負の影響がどのように発生するのかを明らかにすることで、新しい技術が適正に消費者に受け入れられることを目指しています」

たとえば、インターネットを利用した際に、以前利用したことのあるサービスの広告が何度も表示された経験はないでしょうか。企業は、インターネット上の利用者の行動履歴データに基づいて、パーソナライズされた広告を出稿することが可能となっています。利用者にとって興味関心に合う内容であれば有益ですが、一方で追跡されているような

気持ち悪さを感じることもあるかもしれません。このようなネガティブな影響が発生する心理的メカニズムを解明するために、アンケート調査などを行って分析しています。

そして現在、渋瀬はこれらの研究を発展させる形で「AIが消費者行動に与える影響」を研究しています。



AIが作った広告に 消費者は どう反応するのか？

近年、企業の広告にもAIが活用され、AIが作成した広告文や画像が私たちの目に触れる機会が増えています。しかし、多くの人は広告を見ただけでは、それが人間が作ったものなのか、AIが作ったものなのかを正確に判断できません。また、AIが作った広告だと気づいた場合、AIが作ったものだから「すごそう」「信頼できそう」「面白そう」と感じる人もいれば、逆に「人間らしさがなく冷たい」「お金をかけていない手抜き」と感じる人もいます。「このように、消費者がAIに対して抱く先入観や判断の傾向を『AIヒューリスティクス』と呼びます。私の研究では、AIヒューリスティクスがどのように形成され、広告の評価や成果に影響しているのかを分析しています」。



実際に、消費者のAIに対する知識や意識の差による影響について調査分析を行いました。その結果、AIについて十分な知識を持つ人は、AIの長所だけでなく限界も理解しているため、そのAI生成広告を冷静に評価する傾向があります。一方で、AIを日常的に利用していても仕組みを十分に理解していない人は、AIの能力を魔法のように感じ、「AIが作ったものだから正しいだろう」と過剰に信頼しやすくなる傾向でした。

「消費者が気軽にAIを活用できるようになったため、AIに対する知識がなくても『自分はAIを使いこなしている』と思い込む消費者も増えていと考えられます。しかし、AIに対する知識が無い場合には自信過剰となり、AI生成物に対する正しい受け止め方ができなくなっている懸念があります。今後は、AIに関する知識や経験が、AIに対する信頼や判断にどのような影響を与えるのかをさらに明らかにしたいですね」



AIによる消費者行動の変化を解明したい

AIは広告を作るだけでなく、人が情報を集め、比較し、購入を決める過程そのものを変えつつあります。

「生成AIが登場して数年しか経過していませんが、企業のマーケティング活動を大きく変化させてきました。さきに紹介したAI生成広告の他にも、チャットボットやメタバース、バーチャルインフルエンサーなど、AIを活用した技術が浸透しています。そして、こうしたさまざまなAI技術に対して消費者の心理や行動が、今後さらなる変化が起きてくるものと予想されます」

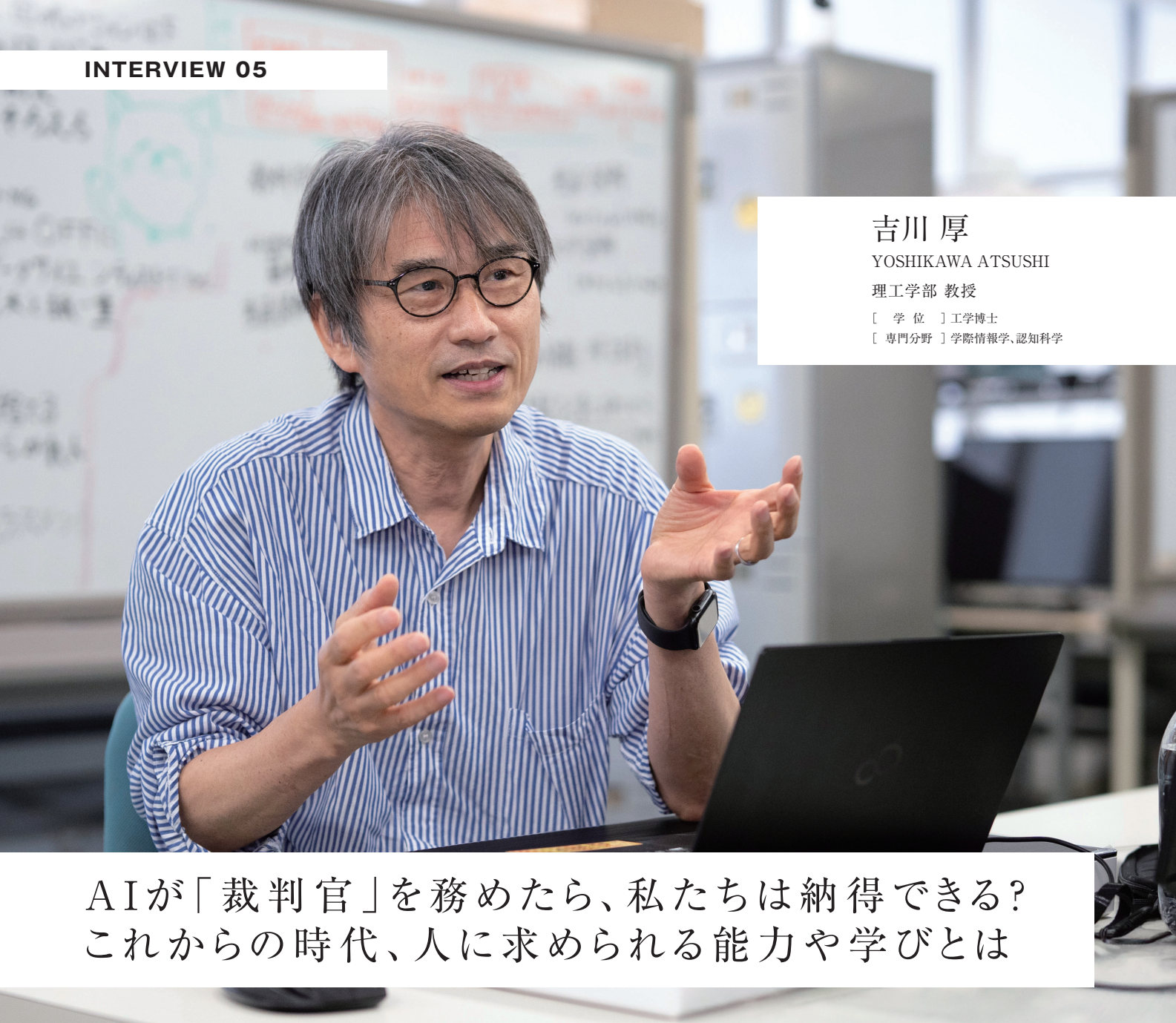
今後は、AIに相談してどの商品をどこで買うかアドバイスをもらうことが一般的になるかもしれません。あるいは、買った商品を

SNSで紹介する以前に、AIと話すことで自分を納得させるのかもしれない。

「さらには、人間が行ってきた作業をAIが代替することによって、“人間とは何か？人間が行うべきものは何か？”など、人間としての役割を考えていくことになると思います。消費者の心理や行動変化のメカニズムを解明しつつけることで、新しい技術の普及を手助けする。そのような研究を今後も行っていきたいです」

AIに対して消費者が抱く印象やAIが生成したコンテンツに対する反応はどのように変化していくのか。渋瀬が追いかける研究テーマは、AIを浸透させる上できわめて重要なものといえます。





吉川 厚

YOSHIKAWA ATSUSHI

理工学部 教授

〔学 位〕工学博士

〔専門分野〕学際情報学、認知科学

AIが「裁判官」を務めたら、私たちは納得できる？
これからの時代、人に求められる能力や学びとは

AIの判決をどう感じるのか、複数のシナリオで調査

もしもAIが裁判官として判決を出したら、私たちはその内容を受け入れられるのでしょうか——。そんな研究を行ったのが、情報学部の吉川厚教授らです。

驚くべき速さで進化するAI。今後さまざまな領域で、人に代わってAIに業務を任せる動きが増えていくでしょう。そんな中で議論し始めているのが「AI裁判官」の可能性。裁判にかかわる裁判員の確保に労力がかかることや、AIの方が「公平な判断ができるのでは」という意見もあり、AIを活用する可能性が注目されつつあります。

とはいえ、AIが出した判決を人がどう感じるかは難しいところ。AIが裁判官として

判断を下すと仮定し、「飢えと貧困から食べ物を盗んだ場合」から「凶悪犯罪を裁く場合」までの複数のシナリオを用いて調査しました。もし自分が裁判を受ける立場だったら、人間の裁判官とAI裁判官のどちらに判断してほしいのかを尋ねたのです。

その結果、AI裁判官への評価は、事件の重さだけで単純に決まるものではないことが見えてきました。人々は、AIなら思い込みや偏見を減らせると期待する一方で、裁判において情状酌量が求められる場面では「温かさ」を、重大な判断の場面では「正統性」を求めます。何をAIに任せたいかは場面によって揺れ動くのです。

なぜこのような傾向が出るのでしょうか。吉川は「人はAI裁判官に対して一律に賛成・反対しているわけではない」と話します。AIへの態度は、その技術そのものへの好き嫌いだけでなく、「どんな場面で使われるか」によって変わるのです。



実はAIに対してバイアスが発生しているかも

AIを活用する上では、そのAIに対して人が抱く感情を考慮することが重要になると吉川は語ります。一例として吉川が紹介するのは、AIのアバターがもたらす「バイアス」です。バイアスとは、人が無意識に抱く思い込みや先入観のこと。

「チャット型のAIをアバターにするケースが増えていますが、実はこのアバターに対してもバイアスが発生する可能性があります」

たとえばコンピューターの投資アドバイ



ザーをアバター化したとして、そのアバターの性別によって相談者が受ける印象の変化を調査した研究がありました。そこでは男性アバターの方が、アドバイスが信頼される傾向にあったとのこと。男女のアバターどちらも中身は同じコンピューターですから、アドバイス内容に差はありません。しかし、アバターによって印象の差が生まれてしまうのです。AIをアバター化する場合も、こうしたバイアスが生まれる可能性があります。

AIが発展した未来の社会で求められる力とは

吉川が専門にしているのは「認知科学」という学問であり、その中でも特に「人がどう学んでいくか」という点を研究してきました。AIを研究の題材に取り入れたのは2020年頃から。背景には「AIが普及すると、人の学びも変わるのではないか」という問題意識がありました。

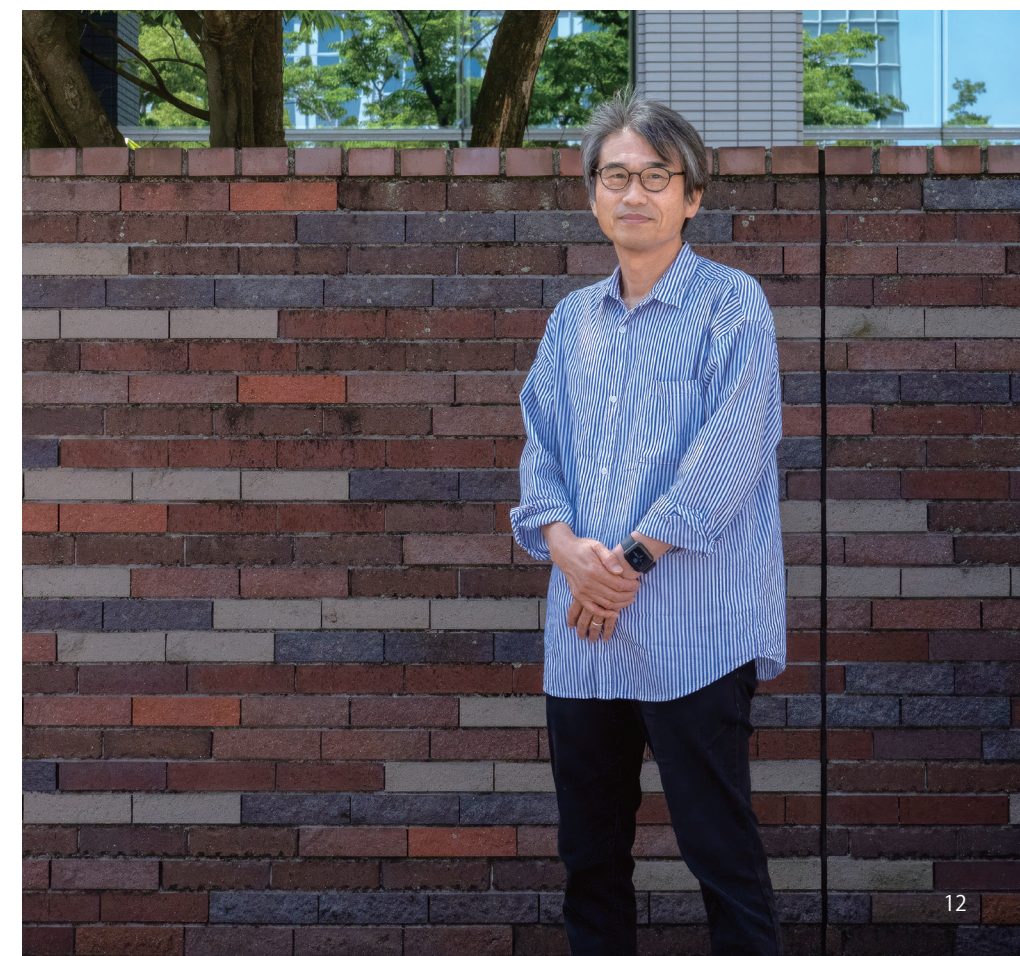
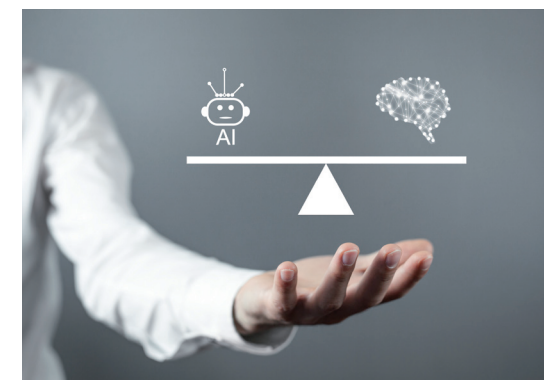
「社会の状況が変わると、人に求められる能力も変化していきます。たとえばコンピューターが普及したことで、私たちに必要な知識やスキルは大きく変わりました。それにより、学ぶことも変わっていった。同じようにAIが普及すると、人に求められる能力、学ぶべきことも変化します。それを知るためにも、AIやそれが浸透した社会について研究しています」

人の能力には、「認知能力」と「非認知能力」という考えがあります。認知能力とは、読み書きや計算などの能力。今までの学力テストで測定してきたものといえます。一方の非認知能力とは、やる気や他人との協調性などのこと。吉川は今、この非認知能力を測定する仕組みを作れないか、全国の大学の教育学部の研究者と共同で取り組んでいます。そしてこれも、AI社会を見据えての研究です。

「計算やデータの処理といった『認知能力』は、AIがとても得意とする分野です。これから、こうした作業をAIに手伝ってもらう場面が増えていくでしょう。だからこそ人間に求められるのは、AIをうまく使いこなしたうえで発揮できる力——たとえば、やる気を持って物事に取り組む、人と協力する、といった

『非認知能力』です。ところが、この非認知能力は数値で測るのが難しい。そこで私は、それを測定する仕組みづくりに取り組んでいるのです」

そろばんから電卓、そしてコンピューターの登場。技術が発展する中で、人の仕事や行動も変化してきました。それはつまり「社会で求められる能力が変わった」といえます。AIの登場も同じです。AIが浸透した社会を見据えて、吉川はこれからも研究を続けます。



KGU横浜スカーフ研究プロジェクトとデザイン画の利活用への期待

横浜の経済と繊維業界の発展の礎を築いた「横浜スカーフ」。横浜市は過去に「日本輸出スカーフ等製造工業組合」から受贈した横浜スカーフ（実物サンプル）約11万点とそれらに係る意匠認定台帳45冊（データ件数約15万件）を2013年度に「地域資源（横浜スカーフ）の活用による産業活性化事業」としてアーカイブ化を実施。またその歴史的文化的価値を提言した山崎稔恵名誉教授は、シルク博物館の協力を得て2011年より継続的に展示を行い、2021年4月には当活動を学術研究と産業利用の両面から後押しすることを目的に学部・部署を横断する「KGU横浜スカーフ研究プロジェクト」が発足しました。さらにシルク博物館及び横浜市歴史博物館と「横浜スカーフ・アーカイブの保存と活用に関する覚書」を交わし、三者協働による展示会を毎年12月～翌年1月にかけてシルク博物館にて開催しています。

2023年には、プロジェクト活動の過程で横浜のスカーフ製造会社から1,200点以上のデザイン画が本学に寄贈され、経営学部の「K-biz横浜スカーフプロジェクト」と協力しデザイン画の整理とデータベース化を進めました。2026年5月21日～6月10日には、京急百貨店・ウィング上大岡（横浜市港南区）の開店30周年記念として実施された展示企画「横浜

スカーフ物語」にて、横浜スカーフの歴史とともに本学所蔵のデザイン画24点と横浜市歴史博物館の協力を得て輸出スカーフ21点をいずれもパネル展示にて紹介、加えて一部実物の特別展示を行いました。

また、デザイン画がデータベース化されたことで、活用用途も拡大されています。本学が進めるKGU乾杯プロジェクトの一環で製造したビールの瓶ラベルデザインへの利活用、さらにスターバックスコーヒー・ジャパン株式会社が販売するマイスターバックスタンプラーのデザインにも使用され、様々な形に加工することが可能となりました。デザイン画の利活用を通じて学部・部署間そして社会とのつながりが進展し、同時に横浜スカーフの価値の発信と歴史の継承に貢献することが期待されます。



佐野 慶一郎教授が、公益社団法人自動車技術会のJSAEフェローエンジニアに認定

人間共生学部共生デザイン学科教授で材料表面工学研究所の研究員でもある佐野 慶一郎教授が、公益社団法人自動車技術会（JSAE）より「JSAEフェローエンジニア」の認定を受け、5月28日に授与式が行われました。

JSAEでは「自動車エンジニアレベル認定」制度を設けており、同会が行う「継続能力開発（CPD）プログラム」による能力開発活動の実施による自己研鑽実績と、企業や大学などにおける実務経験で総合的に審査されます。4段階あるレベルのうち、「JSAEフェローエンジニア」は日本最大の学術団体である自動車技術会における自動車エンジニアとして最高位の資格であり、日本を代表する自動車技術者として、自動車技術に関する広範な総合的知見と極めて高度な専門知識と経験を有することが認められたエンジニア（技術者）です。「日本を代表する自動車技術者として、自動車技術に関する広範な総合的知見を有するか、極めて高度な専門知識と経験を有し、自動車技術者から目標とされる技術者」「後進の指導、育成する能力を身につけている」「高い見識と倫理観を有している」などのレベルが必要とされ、毎年、それらの要件を満たした会員から10名前後選出されます。今回、佐野教授は第20回（2025年度）フェローエンジニアとして認定されました。

佐野教授は、リサイクル工学などを専門とし、「環境に優しい塗装技術」「リサイクル技術」「天然繊維複合材」や「電気自動車のCO₂排出量算定」など、多様なテーマに取り組んできました。今回の認定について「これまで多くの成果と知見を得ることができたのは、共に研究に取り組んだ元同僚や共同研究者、恩師、そして学生の皆さんの発想と協力があったからこそ成し得たものです。とりわけ、ドイツおよび中国との研究交流は、高く評価された取り組みの一つとなりました。今後も、これまでの研究成果と新たな研究を通じて、学生および若手社会人の教育と人材育成に、いっそう力を注いでいきたいと考えております」とこれまでの研究を振り返り、喜びと今後の人材育成への意気込みを口にしました。



『サッカーチームはいかに構成されるか アフェクトと習得の人類学』

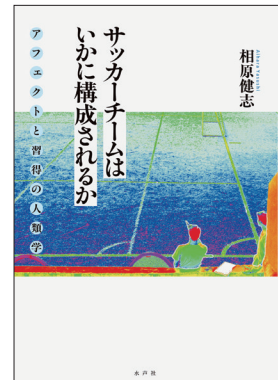
国際文化学部
国際文化学科 准教授 相原 健志

本書は、私が人類学およびスポーツ研究を志したとき以来の研究の成果です。伝統的にスポーツの人文社会科学研究は、選手や監督たちが行なっていることにほとんど焦点を当ててきませんでした。サッカーの場合、特にサポーターやメディアなど、グラウンドの外部を扱う研究が国外でも国内でも圧倒的なマジョリティです。一方で本書は、ポルトガルの小さな地域クラブの内部へと入りこみ、選手と監督たちのトレーニングと試合の営みを人類学の知見にもとづいて考察した研究です。

本書の準備を始めた当初から私は、狭い仲間うちで同調し、その一方で敵から自らを差異化して殻に閉じこもるような集まりとは異なるありようを描きたい、と考えていました。私がポルトガルとともに過ごした選手たちは、敵、つまり対戦相手の挙動を踏まえたプレーを身につけていきました。しかし、だからといってそれは、敵に合わせてしまつて自らの特長を消すようなプレーではありません。むしろ対敵の関係は、自らと味方選手

個々の能力を最大限生かすための梃子として扱われていました。敵は疎外する対象ではなく、自分たちの能力を活かすために取り込むべき要素とされ、1つの集団、チームが構成されていったのです。

W杯のような国際大会をはじめ、サッカーはグラウンドの外でも中でも、ともすれば自らと敵をただ差異化させ、暴力的な対立すら生んでしまうものです。その危うい熱狂とは真逆にあるような——歌手の米津玄師がW杯関連番組のテーマ曲に関連し、敵に対抗するための献身や団結などをテーマとするのではなく、1人ひとりのありかたや生きざまに注目したのに似て——個々の選手たちが敵を自らのうちに含み込んでいく姿に、本書が光を当てていることができればと考えています。



書 名：『サッカーチームはいかに構成されるか アフェクトと習得の人類学』
著 者：相原健志
出 版 社：株式会社水声社
出版年月：2025年12月

『各国史がわかるシリーズ 歴史が見えるドイツ図鑑』

建築・環境学部
建築・環境学科 教授 粕谷 淳司

2022年のドイツ長期滞在をもとに執筆した書籍です。エクснаレッジ社による「建築を通して歴史を語る」という新しい形式の歴史書シリーズの一冊で、イギリス、フィンランドに続く第三弾として刊行されました。

ヨーロッパの建築や都市を考えると、イタリアやフランスに比べて、「ドイツ的なもの」はしばしば捉えにくい存在として感じられます。それはなぜなのか。本書ではこの問いを出発点とし、古代ローマ時代から第二次世界大戦後に至るまで、ドイツ地域の建築と都市の変遷をたどることで、その輪郭を浮かび上げようとしています。

中世から前近代にかけて、ドイツは「神聖ローマ帝国」として、西欧キリスト教世界の形式的中心に位置づけられていました。しかし実態としては、皇帝の権力は限定的で、諸侯や司教、自由都市などが強い自立性を持つ、多数の領邦からなる分権的な国家でした。その多様性が各地域に独自の建築や都市空間

を生み出し、さらには宗教改革にもつながっていきます。本書では、そうした歴史を建築と都市の視点から読み直し、ドイツ地域の歴史を描いています。

また、本書では「地図で読むドイツのかたち」と題した連続地図も制作しました。フランク王国から第二次世界大戦後の東西分断期に至るまで、同一範囲・同一スケールで描かれた地図を並置することで、ドイツという地域の輪郭が歴史の中でどのように変化してきたのかを、視覚的に読み取ることができるようにしています。

本書は、中世の神聖ローマ帝国から近代国家ドイツの形成、さらには現代に至るまでを断絶ではなく連続として捉え、「ドイツという場所」の姿を建築と都市を通して描き出そうとした試みです。

書 名：『各国史がわかるシリーズ 歴史が見えるドイツ図鑑』
著 者：粕谷淳司(著)、粕谷奈緒子(建築イラスト)、中村知史(イラスト)
出 版 社：株式会社エクснаレッジ
出版年月：2026年4月

